

結社誌を訪ねて

中原 修子

入相の鐘を谷中に漱石忌

中西 夕紀

「都市」二月号

東京・谷中は寺院の多い土地です。夕暮れになると、寺々の鐘が町に響きわたります。入相の鐘は、一日の営みを終え人々が家路につく刻を告げる音であり、日本人の生活感覚の奥に深く根付いてきた響きでもあります。本句では「鐘を」という助詞の用い方が印象的です。「鐘が」ではなく「鐘を」とすることで、鐘の音を景の中心に据え、谷中という空間へ響きを投げ入れるような構図が生まれています。冬の澄んだ空気のおかげ、鐘の余韻がゆるやかに広がっていくさまが想像されます。またここには、「入相の鐘」「谷中」「漱石忌」という音・場所・時という三つの要素が、簡潔な措辞で重ねられています。漱石の墓所は雑司ヶ谷にあります。それにもかかわらず谷中が選ばれたのはなぜでしょうか。谷中には、漱石の親友であった正岡子規の墓があります。子規は松山で漱石と同居し、俳句を教えました。若くして病に倒れた子規を、漱石は生涯にわたり支え続けました。

暮れの鐘の響きのなかに、明治という時代を担った文学者たちの気配が立ち上がります。谷中の空に広がる鐘の音は、単なる歳

時の風物にとどまらず、友情と文学の記憶をも静かに呼び起こしているように感じられます。

売る牛に秋の名草を食はず嫁

佐々木一夫

「樹氷」三月号

本句は、売られてゆく牛に秋の名草を食ませるといふ一面面を通して、別れの情を静かに描いています。「売る牛に」とまぎ置くことで、牛の行く末がすでに決まっていることが示されます。そのうえで「秋の名草」を食わせるという行為が続きます。作品中の「食はず」という動詞が印象的です。「食ふ」でも「食ませる」でもなく、「食はず」とすることで、世話をする側の具体的な手の動きが感じられます。嫁の能動的な行為が浮かび上がり、単なる叙景を越えて、人の情の温度が滲みます。また、この句で牛に草を与えるのが「主人」ではなく「嫁」である点は重要です。家の外から来た存在である嫁が、家の者の情を一手に引き受けるかのように、去りゆく牛に最後の名草を与えています。嫁自身もまた、実家を離れた家に入った身です。その立場ゆえに、去りゆくものへの共感が自然に重なります。「秋の名草」という季語も効いています。実りを終え、衰えへと向かう季節です。その秋の草を食ませる行為は、ねぎらいであると同時に、別れの儀式のようにも感じられます。声高に悲しみを語らず、ただ餌を与える姿を描くだけで、農家の現実と人の情とが静かに伝わってきます。

売られてゆく牛と、それを見送る家の者の思いを、簡潔な措辞のなかに凝縮した作品です。

亡き人の予定びつしり古暦

木村 清子

「蘭」三月号

新しい年が始まり、本来なら掛け替えられるはずの古暦が、なお壁に残されています。そこには生前、予定がびつしりと書き込まれていたでしょう。未来へ向けた約束や務めが、隙間なく並んでいた様子が目に浮かびます。予定とは、明日を信じる心のあらわれです。「びつしり」と詰まった文字の密度が、その人の充実した日々を静かに物語っています。しかし、死はその流れを突然断ち切ります。書き込まれた予定は宙に浮き、新しい日付が埋められることはもうありません。古暦の上には、人間の営みが中断された事実が凝縮されています。そこにあるのは、過ぎ去った時間というよりも、果たされることのなかった未来の重みです。壁に残された古暦を見つめるとき、読む者もまた自らの暦を思わずにはいられません。人は誰しも、未来を前提にして日々を組み立てています。その前提のはかなさに気づかされるとき、予定という言葉は一層深い響きを帯びます。マハトマ・ガンジーの「明日死ぬかのように生きよ。永遠に生きるかのように学べ。」という言葉が胸をよぎります。びつしりと書き込まれた予定は、生きることへの真摯な姿勢そのものだったのだと考えます。

木の実なし鮭なし星屑喰うしかなし

高野ムツオ

「小熊座」三月号

雪に覆むみちのくの山々の景が、瞬時に立ち上がります。そして「木の実なし」「鮭なし」と、食物の不在が畳みかけるように示され、山にも川にも食を失った生き物の行き場のなさが、静かに迫ってきます。そして最後に現れるのが「星屑」です。星は言うまでもなく食べ物ではありません。食べられぬものを掲げること、食べるべきものがこの世界から尽きてしまったかのような絶望が浮かび上がります。「木の実なし」「鮭なし」と整えられた調べののち、「星屑喰うしかなし」と三度繰り返される「なし」が、否定の連鎖を形づくり、存在の孤絶を際立たせています。この句の卓越した点は三つあると考えます。第一に、作者は「一度も」熊」と明示していませんが、読者には即座にそれと伝わります。主語を示さないことで、状況はより普遍化されています。第二に、助詞を徹底して削ぎ落とした構造です。言葉が裸のまま並び、断片のように響きます。その切迫したリズムは、飢えた存在の荒い呼吸を思わせます。第三に、「星屑」という語です。熊は星を星屑とは呼びません。星屑とは、人間が宇宙を詩的にとらえた言葉です。自然の現実を描いてきた上五・中七から一転し、最後に宇宙的視野が開かれます。熊を通して、人間が宇宙を見つめている構造がそこにあります。

飢えと孤独の極みにあっても、なお生きるしかない存在の姿が、一瞬に凝縮されています。繰り返される「なし」の響きが静かな調べとなって胸に残り、深い余韻をもつて読者に迫る一句です。

（筆者住所 〒310-0853 茨城県水戸市平須町一八二八―五七二）